

「視点の相対化」

GWに竹田市歴史文化館で開催されている、本校美術科の「竹田市内スケッチ展」を観覧しました。昨年11月に竹田市を訪れ、そこで美術科の生徒がスケッチした作品のなかから選抜されたものを展示していて、出来立ての歴史文化館の真っ白な展示スペースとあいまって、なかなかのアート空間を生み出していたように思います。

こうした、本校生徒のスケッチをその地域に展示し、地元の方に観てもらおうという活動の意味を、皆さんはどう考えますか。これは、美術だけの話ではなく、竹田市の生んだ偉大な作曲家・滝廉太郎の作品を音楽科の生徒がアレンジして、竹田市の方の前で演奏する場合も全く同じです。

私がちょうどスケッチ展を観覧している時に、歴史文化館の佐藤館長さんとお会いしました。そして、館長さんから、次のような感想をいただきました。「地元では当たり前の風景が、外から来られた高校生の目にどう映っているのかが垣間見られる作品ばかりで、新鮮な気持ちで竹田をとらえ直すことができました」。

この言葉の中に、今回のスケッチ展の一つの意義があるように思いました。つまり「視点の相対化」ということです。私たちは、ある一つの視点からものごとを見ています。たとえば、10円玉は丸いということに何の疑問も抱きません。ですから、10円玉は長方形であると言われた瞬間、「そんなばかな」と思ってしまうわけです。しかし、10円玉を横から眺めてみると、確かに細長い長方形となっています。つまりこれが、「視点の相対化」です。絶対だと思っていることを、別の視点から見ると、必ずしも絶対ではない。これが相対化するという行為で、思考に柔軟性と寛容性をもたらします。

このことは、海外に行ってみるとより顕著なわけで、私たちが日本という国の中で大事にしているもの、たとえば1万円札は、他国に入った瞬間、何の価値もないただの紙切れとなってしまいます。私たちは1万円札には価値があると、思い込んでいるわけで、他の価値観の中に入った瞬間、その価値は相対化されてしまいます。だから、「視点の相対化」の練習をするためには、できるだけ若いうちに海外に行くことが大切なのです。

さて、話を戻すと、美術科諸君の切り取った竹田の断片は、地元の方が日頃気にも留めない街に、新たな価値を付与しました。ここにこそ、芸術作品の大きな役割があります。当たり前だと思っている既存の価値観を打破し、新たな価値をそこに生み出していく。何の価値もないと思っていた街が、俄然、味わいのある街に見え始める。聴きなれていたはずの曲が、何だか違う新鮮な曲に聴こえてくる。皆さんの学びは、人々の新たな価値の創造につながっているのです。

このことをしっかりと自覚して、日々の学習をさらに充実させていってください。以上で講話を終わります。